

たくさんの自然科学のとびら

ひらた だいじ
平田 大二(館長)

通巻100号を迎えて

当館の普及広報誌である本誌「自然科学のとびら」が、本号で通巻100号を迎えました。当館の開館は1995年3月、その年の6月に第1号を発行して以来、25年間にわたり毎年発行を積み重ねてきた結果です。

当館の基本的活動は、自然科学に関する資料を収集し、整理・保管して次の世代に引き継ぐこと＝「集める」、資料を基にした調査・研究結果を博物館活動の原動力とすること＝「調べる」、生涯学習や学校教育の支援ならびに社会的貢献を行い、人々の心に地球の自然に対する愛着と感動を呼び起こすこと＝「伝える」です。この「伝える」活動で情報発信の一翼を担っているのが本誌です。

本誌の内容は、表紙の写真・解説から始まり、展示紹介（常設展、特別展、企画展）、普及活動、研究活動、資料紹介、博物館の運営と評価、ボランティア活動、友の会活動、調査フィールド紹介、自然環境保全、絶滅危惧種、自然科学史など多岐にわたり、その時々の特集的な記事を掲載してきました。執筆者は、主に当館学芸員と司書ですが、博物館ボランティア、外来研究員、外部研究者、他館学芸員などの方々にも協力していただきました。濱田隆士初代館長は第1号の記事「発刊にあたって」の中で、「新しい館のさまざまな表情をお伝えし、できるだけ多くの方々に近代総合自然博物館の進む方向をご理解いただけるよう、楽しい情報を満載・発信していきたい」と記していますが、まさしくその通りに続けることで自然と博物館を理解することができるたくさんの情報を提供してきました。各号は当館ウェブサイトでご覧いただけますので、是非ご覧ください。

自然科学のとびら・一覧 URL: <http://nh.kanagawa-museum.jp/research/tobira/>

25年の時の流れ

多くの博物館・美術館が普及広報誌を発行しています。当館でも普及広報誌を発行するために、その準備を開館前の開設準備室時代から進めていました。



図. 全館新型コロナウイルス感染症予防対策実施中の当館エントランスホール(2020年8月). 博物館そのものが自然へのとびらの一つ。多くの人がそのとびらを開け、自然と博物館を楽しんでくれることを願う。

普及広報誌の誌名や性格は、博物館の存在意義と各種活動とも深くかかわります。自然に関する資料を集め、研究して、公開していく博物館、そして人々が自然を理解するために信用できる、頼れる博物館の普及広報誌としてふさわしい誌名は何か。内容をどうするか、誰が書くのか、読者対象をどうするか、どこに配布するかなどについても検討を重ねた結果、誌名は「自然科学のとびら」となりました。

そして、この25年の間に本誌を取り巻く状況も様々な変化がありました。開館からしばらくの時期は、当館の広報手段は紙媒体でした。本誌も印刷予算の都合により印刷部数や配布方法、配布先を限らざるを得なかったため、読者も限られた状況が続いていました。その後、インターネット環境が整備され本誌はウェブページでの掲載も可能となって状況が大きく変化しました。現在は、誰もがいつでも見て読むことができます。

どこにでもある自然のとびら

自然界は多様です。宇宙があつて、地球があつて、そして生き物がいます。わかったこともたくさんありますが、まだまだわ

かっていないことや知らないこともたくさんあります。わからないこと、知らないことを調べたい、理解したいという知的好奇心は大切です。本誌がそのきっかけになれば幸いです。自然の中には、無数の見えないとびらがありますが、しかしそれらのとびらを開けるためのそれぞれの視点が必要です。野外観察や標本観察などのマクロな視点、顕微鏡や分析機器などを使うミクロの視点、書籍や論文など文字や写真・図などから情報を得る視点などです。博物館自体も自然のとびらの一つです。学芸員はそれらのとびらを開けるための視点と情報を提供しています。一つひとつ順番に開けては調べて、理解を進めていきます。そこから科学が始まります。これまで知らなかったことに気づき、理解できた時の楽しさは格別です。とびらの向こう側にある世界を体験してみませんか。皆さんと一緒にさまざまな自然のとびらを発見し、そのとびらを開け続けることができれば願います。当館は自然科学に関する“もの”と“こと”を集め、調べ、記録し、伝えていきます。今後も、本誌「自然科学のとびら」をお楽しみいただければ幸いです。